

近世における城と城下町の 建設史年表に関する考察 (その2)

東京大学工学部 正会員 新谷 洋二

A Study of Chronological Table
on Construction History
of Modern Castles and Their Towns

by Yoji Niitani

概 要

近世初頭に建設された城下町の多くは現在も都市として生き続けているため、その成立の経緯・時期は都市計画史などの上で重要である。前回の論文で、中部、大類・鳥羽、玉置による城と城下町の建設史年表を基礎にして作成された小川の一覧表について、作成に当たった問題点を提起するとともに、8ケース・スタディを行い、正しい表現のあり方について検討した結果、さらに数多くのケース・スタディを積み重ねることが必要とされた。このため今回の論文においては、以上の課題を明確にするため、前回に引き続き、年表作成上、問題点の見出させる幾つかの城と城下町のうち、岩出山・丸亀・宇和島・高崎・仙台・福岡・松山・秋田・大垣・彦根・萩・浜田の各城についてケース・スタディを行い、それぞれ個別に検討することにより、個別に存在する問題点を摘出した。こういった検討を積み重ねることにより、全体の内容について、正しい表現のあり方を考究するとともに、城郭史年表に関して試論的な検討を行うことによって、土木史年表の作成に当たって検討すべき課題を考究することを目指した。(城、城下町、年表)

1. はじめに

わが国の都市には近世初頭に計画的に建設された城と城下町に端を発するものが多いので、その成立の経緯・時期は城郭史、都市史、都市計画史上のみならず土木史上からも重要である。

前回の論文でも説明した通り、近世の城と城下町の創築状況については、既に小川博三著「日本土木史概説」【以下、文献1】と略す】の中に、一覧表¹⁾として示されている。この表は中部よし子著「近世都市の成立と構造」【以下、文献2】と略す】・大類伸・鳥羽正雄共著「日本城郭史」【以下、文献3】と略す】・玉置豊次郎著「日本都市成立史」【以下、文献4】と略す】において、文献2)と4)は年次順に、文献3)は城別に、それぞれ特徴ある形で示された城または城下町の建設状況の一覧表を基礎に、安土城築城以降、寛永年間までについて年次順にまとめられたものである。もし以上の基礎となった3文献に記述されていたものが、すべて正確に完成された真の姿を表しているものであるならば、集合整理することにより、豊富で正確な表を作成することができよう。しかし、原著者たちも述べているように、それぞれの一覧表の中には、着手年次に異説があったり、工事種別の判定が難しかったり、城と城下町の着工が必ずしも同じとは限らなかったり、新規築城・修築・増築などの表現もその定義は曖昧であるといったように、まだ問題となる記述を含んでいた。また各人によって採られた原資料の違いや判断の違いも当然あったと考えられる。このため、上記の諸資料を合成することにより、種々の問題を明確に露呈する結果となった。例えば、同じ城と城下町が2年続けて築城・新営されたり、改名された同一の城や改名した同一の人物がそれぞれ別のもので並記されているというような結果と

なった。しかし、このことはむしろ後進の者にとって、その内容を詳細にわたって点検していこうとする研究の契機ともなった。

本文においては、前回の8ケース・スタディの検討と同じく、上記の城と城下町の一覧表を題材として、そこで引用された原資料も含めて、さらに幾つかのケース・スタディを積み重ねることにより、事実を探究するとともに、城郭史年表の検討を通じて、土木史年表の表現のあり方を考察していきたい。なお、今回もケース・スタディでは、城を中心に取り扱い、城下町は付带的に取り扱っている。

2. ケース・スタディ

文献1)の城と城下町の建設に関する年次別の一覧表を検討するため、文献2)～4)の3文献を基礎にして、どのように文献1)を作り上げることができるか試験的に実行してみた。その結果、一応上記3文献と文献1)の一覧表との関係を把握した。さらに、それらの資料を城と城下町の108箇所別に分類して、それぞれの箇所について検討しながら、上述のような問題点を考えてみた。しかし検討すべき箇所量が膨大なため、特に問題点が顕著に見出させる箇所のうち、前回の論文では8箇所を選んでケース・スタディを行って、実際に問題点を検証しつつ、正しい表現のあり方を検討してみたが、今回も同様な方法によって12箇所のケース・スタディを行い、検討を進めることとする。

(1) [岩出山城]

1591(天正19) 陸奥岩手山 伊達政宗 築城 <文献2)>

岩手沢城は南北朝時代の頃に氏家氏が創築し、以来拠点としていた。1590年(天正18)豊臣秀吉の奥州仕置によって、大崎領が没収されるとともに氏家氏も滅び、その旧領は木村吉清父子に与えられた。ところが、総検地に反対して葛西・大崎一揆が起こった結果、その一揆鎮定の過程で伊達政宗は1591年米沢領を没収され、代わりに旧葛西・大崎領を与えられた。一揆平定後、政宗は奥州仕置のために下向した徳川家康の進言を受けて、家康とその家臣榊原康政が同年8～9月にかけて縄張・普請した岩手沢城を居城とすることとし、9月に普請成就したところに、米沢より移り、名を岩出山と改めた。1601年(慶長6)政宗は仙台に居城を移し、1603年に岩出山城を4男伊達宗泰に与えた。上記の記述のうち、城名の陸奥岩手山は岩出山と修正すべきである。また従来から城があったことを考えると、修築とした方がよいと考えれば、次のようになる。

1591(天正19) 岩出山 徳川家康・伊達政宗 修築

(2) [丸亀城]

1597(慶長2) 丸亀 生駒親正 築城 <文献3), 4)>

丸亀城の起こりとしては、応仁(1467～69)の頃から戦国時代にかけて、奈良氏の支城が亀山にあった。「生駒記」によると新領主生駒親正はかつて宇多津聖通寺城にあったとき、この亀山の地に築城しようと考えたが、西に偏していたため、その計画を放棄し、高松城に決定したという経緯があった。親正は1597年(慶長2)西讃を押さえる要害として、再び亀山の地に着目し、築城に着手し、丸亀城と号し、子の一正を城主とした。築城後、城下町の建設も始まったらしい。1602年完成したが、領主となった一正は高松城に移り、丸亀は番城となった。その後1615年(元和1)の一国一城令により、廃城となった。

生駒高俊が転封された後、1641年(寛永18)肥後国富岡の領主山崎家治が西讃5万3千石を与えられ、廃城になっていた亀山を選び、1642年(寛永19)丸亀城の再建に着手し、翌年竣工したといわれる。別説では1642年幕府の許可を得、翌年着工したともいわれる。この時代に城下町は本格的に発展した。しかし山崎氏は3代治頼が1657年(明暦3)に幼少で死んだため、絶家となり、

代わって播磨国龍野城主京極高和が転封されてきた。高和は入部後間もなく、山崎氏時代に未完成だった城の修築を再開し、子の高豊の1670年（寛文10）にほぼ完成したとみられる。例えば、山崎氏が着手した天守の築造も高和の1660年（万治3）に完成した。上記記述は以下の通りとする。

1597（慶長 2）	丸亀	生駒親正	築城着手
1615（元和 1）	"	生駒正俊	廃城
1642（寛永19）	"	山崎家治	築城再建に着手

（3）〔宇和島城〕

1600（慶長 5）	板島	藤堂高虎	築城	<文献2>
1614（" 19）	宇和島	藤堂氏	修築	<" 2> , 3>
1615（元和 1）	"	伊達氏	この年以降城修築	<" 3>

宇和島湾に突き出した標高80mの分離独立丘陵の山頂に立地したのが宇和島城である。宇和島城の前身である板島丸串城がいつ誰によって築城されたかは、明らかではない。文献史料に現れるのは1575年（天正3）であり、従来の研究〔日本城郭体系、16、p. 404〕によれば、1560年代末期から1570年代初頭（永禄年間の末から元亀年間）にかけて、西園寺氏の支城として構築されたものと考えられている。1585年（天正13）には小早川隆景の所領となり、持田右京が、1587年には戸田勝隆の所領となり、戸田与左衛門が、それぞれ城代として入城していた。1595年（文禄4）7月、藤堂高虎が宇和郡7万石に封じられると、板島丸串城を本城として入城した。1595年の「聿修録」によると、高虎は板島を宇和島と改めているが、以後も現実には宇和島を使わず、板島を使用している。一般的には1615年（元和1）に伊達秀宗が入部してから宇和島と称するようになったといわれている。

高虎は1596年（慶長1）8月に城の修復に着手したが、翌年再び朝鮮に出兵した。この間も工事は何とか引き続き行われ、1597年9月には普請をほぼ終え、1599年末には建物の作事もほぼ終わっている。しかし、工事はなお続けられた。1601年には天守の工事はほぼ修了したとみられる。一般の説では、ここで工事が完了したといわれている。しかし、1604年、河後森城の天守を板島城に移して月見櫓としたことが藩の記録である「不鳴条」や「宇和旧記」にもみえており、その後も工事は続き、1604年に完了したとも考えられる。

高虎は1600年、関ヶ原の戦功により伊予半国20万国に増封され、1602年今治城の築城に着手し、完成後、今治城を居城とした。しかし、1608年に伊勢・伊賀両国で22万石に転封されたため、代わって伊勢国安濃津城主富田信高が宇和10万石に転封され、板島城に入城した。1613年信高は改易・除封されたため、板島領は一時幕府領となり、藤堂高虎に預けられ、老臣藤堂良勝が城代となった。1614年（慶長19）8月、城門3箇所、櫓11箇所の作事が行われた。

同年12月、伊達秀宗が板島10万石に封じられ、1615年3月、入城した。1662年（寛文2）2代宗利は城が老朽化したため、幕府に城修築を願って許しを得て、1664年松根市郎右衛門・古谷九太夫を普請奉行として修築に着手し、1671年（寛文11）に工事は完成し、面目を一新した。その間、新しい天守も完成した。

以上のことから、戦国時代の支城として造られた板島丸串城は、藤堂高虎の居城となつたことによって、1596年に近世の城としての修築に着手されたとみられる。その後朝鮮出兵したが、工事はともかく続けられ、1602～1604年頃に完了したとみられる。また、藤堂氏が幕府の番城時代に行ったのは作事であった。伊達氏が大改修をしたのは寛文年間であることは明らかであるので、上記記述は以下のとおりとするのがよいと考える。

1596（慶長 1）	宇和島（当時、板島）	藤堂高虎	修築着手
------------	------------	------	------

1614 (慶長19)	宇和島 (当時、板島)	藤堂高虎	修築 (櫓・城門の作事)
1664 (寛文 4)	宇和島	伊達宗利	修築着手
1671 (" 11)	"	"	修築完成

(4) [高崎城]

1597 (慶長 2)	高崎	井伊直政	築城	<文献4)>
1598 (" 3)	"	井伊氏	修築	<" 3)>
		本多氏	"	<" 3)>

徳川家康は箕輪城主井伊直政に命じて1597年中山道・三国街道の分岐点にあたる要衝の和田の地に新城を築かせた。翌1598年完成して、直政は箕輪から新城に移転し、和田を高崎と改めた。築城とともに城下の町割りに着手した。なお本多氏に関する記事は誤りであろう。本多氏は高崎の城主の中に見当たらず、何故ここに入ってきたか意味不明である。あるいは他の城 (例えば宇都宮城) の分がまぎれこんできたか? この結果、次のように記述すべきであろう。

1597 (慶長 2)	高崎	井伊直政	築城・町割り着手
1598 (" 3)	"	"	築城一応完成

(5) [仙台城]

1600 (慶長 5)	仙台	伊達政宗	築城	<文献2), 3)>
1601 (" 6)	"	"	新営	<" 4)>
1610 (" 15)	"	"	城大広間造営	<" 2)>

1600年 (慶長5) 関ヶ原の役に、陸奥国名取郡北目に本陣を置いて上杉景勝に対していた伊達政宗は、家臣の山岡志摩を上方に遣わし、千代青葉山の地に築城することについて、徳川家康の許可を得て、12月、自ら新城の縄張始めを行い、千代の文字を仙台と改めた。翌年1月には後藤孫兵衛・川島豊前・金森内膳・原次右衛門・真柳十介の5名を惣奉行として城普請に着手した。2月より5月の間に岩出山の土民を仙台に移住させるとともに、4月に政宗も仙台城に移ったが、秋には上洛した。工事はさらに続けられ、12月には仙台城と城下町とを結ぶ大橋が架けられ、1602年 (慶長7) 5月に仙台城は一応完成した。これは本丸の部分である。翌年8月、政宗は江戸から帰って仙台城に入城した。公館である大広間は1610年に完成した。それと前後して種々の建物も造られた。しかし1616年 (元和2) 7月の大地震により櫓・城壁などが崩壊したが、間もなく修理されたものと見られる。

1636年 (寛永13) に襲封した伊達忠宗は本丸の北麓に居館としての二の丸を造営することを計画し、1638年 (寛永15) 7月に幕府の許可を得て、9月に工事に着守した。その際、若林城の建物を撤去して、その古材も再利用して、建物を造った。翌年6月に忠宗は本丸から二の丸へ移り住んだ。同時に若林城も廃城とした。この結果、仙台城は戦国的山城から近世的平山城に変貌した。

従って、上記の記述は下記の通りとすべきであろう。

1600 (慶長 5)	仙台	伊達政宗	築城縄張
1601 (" 6)	"	"	築城着手
1638 (寛永15)	"	伊達忠宗	二の丸増築着手

(6) [福岡城]

1600 (慶長 5)	福岡	黒田長政	築城	<文献3), 4)>
1601 (" 6)	"	"	"	<" 2)>

関ヶ原の戦功により筑前一国52万石を与えられた黒田長政は、前筑前国主小早川秀秋の居城名島城

を1600年（慶長5）12月8日受け取り、同11日に入城した。名島城は要害であったが、三方海に囲まれ、城下町とすべき背後地も狭かったため、領国経営の適地を搜した結果、福崎の地を選び、1601年より野口佐助一成を普請奉行として新たに築城を始め、7ヶ年を費やして1607年（慶長12）に完成した。また築城起工と同時に城下町の建設も進めた。なお新城は黒田氏の故地、備前国邑久郡福岡郷にちなんで福岡城と名付けられた。以上から、上の記述のうち、文献3）および4）では「1600年に築城」とあるが、長政が名島に入城したのはその年末であり、その年のうちに幾つかの築城候補地から新規築城の地を決定するには時日も少なく、諸文献から考えると、1600年は入国の年で、新規築城の年はその翌年とするのが妥当とみられるので、下記の通りに記述すべきであろう。

1601（慶長 6） 福岡 黒田長政 築城・城下町建設着手
1607（ " 12） " " 築城完成

（7） [松山城]

1602（慶長 7） 松山 加藤嘉明 新営 <文献2），4）>
1603（ " 8） " " 築城（松前城より移る） <" 2），3）>
1642（ " 19） " 松平氏 城修築 <" 3）>

伊予正木（松前）城主として10万石を領していた加藤嘉明は、1600年（慶長5）関ヶ原の戦功により、20万石に増封されたため、翌1601年、新たな居城として、道後平野のほぼ中央の勝山に築城することを徳川家康に上申して許可された。1602年1月15日、勝山築城の工を起こした。これと前後して、城下町の計画もできあがり、その建設にも手を上げた。1603年10月、嘉明は家臣および正木の住民とともに居を新城下に移し、松山と名付けた。1605年には本丸と5層6重の天守が完成し、さらに1607年、三の丸の完成に伴い、嘉明が入居するに至った。その後も工事は続いたが、すべてが完成しないうちに、1627年（寛永4）に嘉明は42万石の太守として、会津若松城主に転封され、代わりに蒲生忠知が20万石で入封したが、1634年（寛永11）に死去し、嗣子なく断絶した。

1635年（寛永12）伊勢桑名11万石の城主松平定行が松山15万石に転封されきた。定行は1639年（寛永16）に天守を始め門塀、石塁等の改修について幕府から許可を得て、5層6重の天守を3層4重に改築するのを始めとする改修工事を3年後の1942年（寛永19）に完成した。

従って、上記の記述は城と城下町の建設の始まりを示すものに限定すれば、以下の箇条だけでよい。

1602（慶長 7） 松山 加藤嘉明 築城・城下町建設着手

（8） [秋田城]

1602（慶長 7） 秋田 佐竹義宣 新営 <文献3），4）>
1603（ " 8） " " 築城 <" 2）>

1600年（慶長5）の関ヶ原の役で日和見的な態度を示した常陸国水戸城主佐竹義宣は1602年（慶長7）5月伏見に上った際、突如として出羽国秋田へ国替を命じられ、7月秋田へ直行し、9月とりあえず土崎湊城に入った。この城は佐竹氏と交代に常陸国宍戸に転封された安東秋田氏の古くからの居城であった。しかしこの城は、土崎湊という良港を控えて、交通の便にめぐまれていたが、城郭としては規模も小さく、平城で、それほど堅固な要害ではなかったので、新しい居城が必要とされた。義宣は直ちに新しい城地を探し、久保田の神明山を適地として決定し、翌1603年5月、築城の普請に着手し、1604年8月新城に移った。家臣たちはとりあえず仮住まいをしていたが、1607年より本格的に城下町の町割を次第に始めていった。

以上から明らかなように、1602年に新城地の検討を始めてはいたろうが、公式には翌年5月に築

城普請に着手したとあるので、下記のようにすべきであろう。

1603（慶長 8） 久保田（現在、秋田） 佐竹義宣 築城着手

（9） [大垣城]

1613（慶長18） 大垣 石川忠総 城・町増修 <文献4>

1622（元和 8） " 伊藤氏（？） 改修 <" 3>

1634（寛永11） " "（？） 増築 <" 3>

大垣城の創築は古く、1500年（明応9年）に土岐氏の被官竹腰尚綱が築城したとも、1535年（天文4年）に土岐氏の一族宮川安定が築城したともいわれる。当初は砦程度の小規模な構えであった。城主は次々と入れ替わったが、氏家直元（ト全）が城主となるや、1563年（永禄6）から翌年にかけて、城の拡張・増築が行われた。また、一柳直末が城主であった1585（天正13）11月には大地震があり、城下は大損害を受けた。「新修大垣市史」によれば、この時、城も倒壊し、それを機に天守を創建し、1588年（天正16）に完成したとも言われだしてきている。従来は伊藤祐盛が1595年（文禄4）から翌1596年（慶長1）にかけて天守を創建したといわれていたが、天正16年の刻印のある筒瓦の発見により、前者の説を有力にしている。関ヶ原の役の際は、祐盛の子、伊藤盛宗が城主であったが、西軍に加わり、敗死したため、除封された。

戦後は徳川譜代の大名が相次いで城主となった。すなわち、石川氏3代、松平（久松）氏2代、岡部氏2代、松平（久松）氏1代が続き、1635年（寛永12）戸田氏鉄が入部し、以来戸田氏が11代続いた。この中で、1613年（慶長18）石川忠総は城を改修・拡張して、城下町を整え、それを包む総堀を造り、1620年（元和6）松平忠良は天守の改造を行った。さらに1635年（寛永12）に戸田氏鉄が摂津国尼崎城5万石から大垣城10万石に増封されて入部すると、幕府の許可を得て、1641年（寛永18）から1649年（慶安2）にかけて、城の修築・改築を行っている。

以上のように、大垣城の築城の時期は戦国期であって、不明確であり、近世の増改築としては、以下のものを挙げておくにとどめる。なお上記の年表のうち、伊藤氏の取り扱いは明らかに間違っている。

1613（慶長18） 大垣 石川忠総 城と城下町の増改修

（10） [彦根城]

1603（慶長 8） 彦根 井伊直政 新営 <文献3>，4>

1604（ " 9） " 井伊直勝 築城 <" 2>，3>

1606（ " 10） " 井伊氏 天守閣を大津城より移す <" 3>

上野国高崎城主井伊直政は関ヶ原の戦功により、石田三成の居城であった近江国佐和山城を授けられ、1601年（慶長6）1月、佐和山城に入った。直政は磯山に居城を移築しようとしたが、翌1602年2月、関ヶ原の戦で受けた鉄砲傷の再発により急逝した。嫡男直継（後に直勝と改名）が遺封を継いだ。若冠13才であったため、老臣たちが直政の遺志を受け、居城の移築について検討し、同年2月、老臣木俣守勝が伏見にて徳川家康に願い出た結果、磯山ではなく、彦根山への移築を命じられた。家康は許可しただけでなく、奉行3人を差し向け、7ヶ国12大名に普請の助役を命じた。築城の着工の時期については、以前から1603年（慶長8）7月説と1604年（慶長9）7月説とがあったが、従来の諸研究によれば、1603年築城着工、1604年に佐和山城から彦根城へ移ったものと考えられる。また1603年、彦根築城の工事が開始されるとともに、城下町の建設も始められた。天守の造営については1604年頃には始まっており、1606年には完成したと考えられる。この頃には内濠内の中心部はほぼできてきたが、なお工事は続行された。その後、大坂の陣のため、工事は一時中断された。その間、病気がちな直継に代わって働いた弟直孝が1615年（元和1）に藩主を命じられ、

直継は上野国安中城3万石を分与され、直勝と改名した。第2期工事は直孝によって1616年（元和2）に再開され、1622年（元和8）に濠・土居・櫓・藩主居館および表御殿などの部分ができ、築城はほぼ完成した。従って、上の記述は一応次の通りとした方がよい。

1603（慶長 8） 彦根 井伊直継 築城・城下町建設着手
 1606（ " 11） " " 天守完成
 1622（元和 8） " 井伊直孝 築城ほぼ完成

(11) 〔萩城〕

1603（慶長 8） 萩 毛利輝元 築城 <文献2>
 1604（ " 9） " " 新営 <" 3> , 4>
 1608（ " 13） " " 城完成（広島より移る） <" 4>

1600年9月の関ヶ原の戦に戦わずして敗者となった毛利輝元は中国8ヶ国から防長2ヶ国の領主に減封された。同年11月居城の広島城を新領主福島正則に明け渡した。これに先立って、9月大坂城を退去した輝元は戦後もずっと畿内に留め置かれ、1603年5月に江戸に出て、徳川家康に詫言を入れた後、6月伏見に戻り、9月家康の許可を得て、10月ようやく山口に至り、新たに居城を築くため、防府桑山、山口鴻の峯、萩指月山の3ヶ所の候補地を選んで、1604年1月幕府に伺いを立てた結果、2月萩指月山築城の許可を得て、6月築城工事に着手した。11月に輝元はまだ工事中の新城に入城している。翌年城下諸士の邸地を決めて、町割も行い、1608年6月築城工事は終了した。従って、1608年当時、輝元は旧領地の広島にいる筈もない。以上により、上記は以下の通りとなる。

1604（慶長 9） 萩 毛利輝元 築城着手
 1608（ " 13） " " 築城完成

(12) 〔浜田城〕

1619（元和 5） 浜田 古田氏 築城 <文献3>
 1620（ " 6） " 黒田重治 築城移転 <" 2>

伊勢国松坂城主古田重治は、大坂の陣の戦功により、1619年2月石見国の那賀・美濃・邑智三郡のうち5万石余を賜って、8月入封した。重治は入国後一先ず岩上の館に入り、新城を築くための地を探し、浜田の鴨山を選び、亀山と名を改め、縄張を行った。1620年2月築城工事に着手した。幕府は元和の法度により新規の築城を原則的に許さなかったが、「浜田城覚書」に依れば、「浜田は異国に近い所なれば異国の押えなり、また、中国・西国の物聞のためなり」として許可したという。同年11月には普請を大体完了し、作事に取りかかり、更に城下の町割に移った。1621年（元和7）2月重治は岩上の館から城内の新御殿に移り、1623年（元和9）5月、城と城下町の工事を終了した。

上記の黒田重治は古田重治の誤植であろう。文献2）では「石見浜田城（古田重治）竣工、移転」とあるので、小川は「築城移転」と解釈したのでであろう。これは上述の通り、浜田城の完成により岩上の館より新城に移ったことを意味しているが、年次が1年違っている。従って下記のように改める。

1619（元和 5） 浜田 古田重治 城地選定、縄張
 1620（ " 6） " " 築城着工、城普請完成、城作事・町割着手
 1623（ " 9） " " 城・城下町完成

3. まとめと今後の課題

ケース・スタディにおいて、前回の8ケースに続き、今回は12ケースの検討を行ってみたが、前回2. (3)で述べた取り扱い上の問題点に加えて、「築城着手の年次をどのような段階の時を以て規定する

か」という問題があることが分かった。築城の内容を考えてみると、通常、新領主がある領土を与えられた場合に、①新領土に入部、②築城の発想、③城地候補地の選定、④（上部権力者の許可を得て）城地の決定、⑤縄張、⑥普請、⑦作事、⑧城主の移転入城、⑨築城完成、といった過程を経て、築城が行われている。この築城の過程の中で、一般に着手した頃の年次は比較的明確に示されているが、完成の年次は記録的には曖昧で分かりにくいものとなっている。例えば、城全体が未完成でも、本丸などの主要部が概成すれば、城主は入城して、さらに普請・作事を継続して実施する場合が多く、時によっては全体としては未完成のままに途中で工事を終了することもあった。従って完成段階の年次はますます判断しにくいものとなっている。そのため、築城着手の年次を以て築城年次と考えていく方が統一して考えやすい。この場合、築城着手の時期を①～⑥の中のどの段階を以て考えるかが問題になる。今回の検討によれば、築城、新営、修築といった内容が2年続いて出てくる例が、高崎・仙台・福岡・松山・秋田・彦根・萩・浜田に見られるが、これらのケース・スタディから通常は2～3年の間に①から⑥の着手に至るまでの段階が進んでおり、これらの段階のどの段階が明確に示されていたか、あるいはこの中のどの段階が始まった時を築城着手の時期と考えたかにより、判断が分かれたと思う。築城着手の時をそれぞれの文献で得られた資料と判断が異なっていた結果、二つの築城年次が生じたのである。今回、私は判断しやすい⑥普請の着手の段階を以て、築城着手と考えたが、今後⑤縄張の着手や④城地の決定の時期を築城着手の時期と考えることも検討の余地が残る。

108ケース中、問題点がはっきり把握できそうなもの20ケースについて検討しただけなので、さらに今後引き続き検討作業を行うことにより、全体を通じて取り扱い上の問題点を取りまとめていく予定である。終りに当たって、本研究への意欲を湧かせて下さった故小川博三先生を始めとする先人諸氏に心から感謝する次第である。

〔 参 考 文 献 〕

- 1) 小川博三：「日本土木史概説」共立出版，p. 98～103，昭和50。
- 2) 中部よし子：「近世都市の成立と構造」新生社，p. 360～367，昭和42。
- 3) 大類伸・鳥羽正雄：「日本城郭史」雄山閣，p. 526～533，昭和11。
- 4) 玉置豊次郎：「日本都市成立史」理工学社，p. 594～601，昭和49。
- 5) 児玉幸多・北島正元監修：「新編物語藩史」全13巻，新人物往来社，昭和51。
- 6) 児玉幸多・坪井清足監修：「日本城郭大系」全20巻，新人物往来社，昭和56。
- 7) 探訪ブックス「城」全11巻，小学館，昭和56。
- 8) 小林清治編：「仙台城と仙台領の城・要害」名著出版，昭和57。
- 9) 「丸亀市史」丸亀市史刊行頒布会，p. 1～92，昭和28。
- 10) 太田博太郎編：「日本建築史基礎資料集成14，城郭Ⅰ」中央公論美術出版，p. 39～45，昭和53。
- 11) 太田博太郎編：「日本建築史基礎資料集成15，城郭Ⅱ」中央公論美術出版，p. 7～9，55～57，昭和57。
- 12) 山崎一：「群馬県古城址の研究，下巻」群馬県文化事業振興会，p. 3～34，昭和47。
- 13) 「重要文化財福岡城南丸多間櫓修理工事報告書」福岡市，p. 1～6，昭和50。
- 14) 「重要文化財松山城天守外十五棟修理工事報告書」松山市，p. 8～11，昭和44。
- 15) 松山城編集委員会編：「松山城」増補4版，松山市役所，p. 51～96，昭和59。
- 16) 渡辺景一：「図説久保田城下町の歴史」無明舎出版，p. 12～37，昭和58。
- 17) 萩市史編集委員会編：「萩市史，第1巻」萩市，p. 3～21，109～214，昭和58。
- 18) 田村紘一：「石見浜田城」関西城郭研究会，昭和50年8月。